

私の出会った絵



アンドレ・ブラジリエ「アイルランドの鏡」(1977)
Editions EPHIの絵がき
より

社会学部専任講師 森田 雅也

一枚の絵が私

その絵に初めて出会ってからもう十年近くが経つてであろうか。それは私の何度目かの誕生日を祝ってくれる友人からの絵がきたった。

絵画に対して特別の知識も関心も持っていなかった私はアンドレ・ブラジリエという名前などもちろん知らずに、その絵の持つ上品で柔らかな色彩に目を奪われていた。い

やもつと正直に言うと、薄紫の衣服を纏った女性に、そして彼女の鏡の中の表情にただただ魅了されていた。

「アイルランドの鏡」と題されたその絵の中の彼女は、透き通るような白い肌をやわらかそうな黒髪、切れ長の目で静かに遠くを見つめている。どこかなほかなげで思

きな絵」である。現代具象絵画を代表する画家の一人とされるブラジリエは叙情的な美の世界を展開する中で多く女性を描いているが、その中でも「アイルランドの鏡」の彼女は一番素敵な女性であるように思われる。

先日、大阪で「ブラジリエのブラジリエ展」が開かれていたが、そこには「アイルランドの鏡」は展示されていなかった。少し残念に思いながらも、彼女を独り占めできたような気がしてなんとなく嬉しかった。

が、彼女には何とも近づきたい気品が漂っている。

一目見た瞬間から彼女の虜になってしまった私にとつて、「アイルランドの鏡」は忘れぬことのできな「私の好